

小さい太郎の悲しみ

新美南吉



お花畑から、大きな虫がいつびき、ぶうんと空にのぼりはじめました。

からだが重いのか、ゆっくりのぼりはじめました。

地面から一メートルぐらいのぼると、横にとびはじめました。

やはり、からだが重いので、ゆっくりいきます。うまやの角の方のろのろとゆきます。

みていた小さい太郎は、縁側からとびおりました。そしてはだしのまま、筋をもつて追っかけてゆきました。

うまやの角をすぎて、お花畑から、麦畑へあがる、草の土堤の上で、虫をふせました。

とつてみるとかぶと虫でした。

「ああ、かぶと虫だ。かぶと虫をとつた」

と小さい太郎はいいました。けれどだれもなんともこたえませんでした。小さい太郎は兄弟がなくてひ

とりぼつちだったからです。ひとりぼつちということはこんなときたいへんつまらないと思います。

小さい太郎は縁側にもどつてきました。そしておばあさんに、

「おばあさん、かぶと虫をとつた」

とみせました。

縁側にすわつていねむりしていたおばあさんは、眼をあいてかぶと虫をみると、

「なんだ、がにかや」

といつて、まためをとじてしまいました。

「ちがう、かぶとむしだ」

と小さい太郎は口をとがらしていいましたが、おばあさんには、かぶと虫だろうが蟹だろうが、かまわないらしく、ふんふん、むにやむにやといつて、ふたたび眼をひらこうとしませんでした。

小さい太郎は、おばあさんの膝から糸ぎれをとつて、かぶと虫のうしろの足をしばりました。そして縁板の上を歩かせました。

かぶと虫は牛のようによちよちと歩きました。小さい太郎が糸のはしをおさえると、まえへ進めなく

て、カリカリと縁板をかきました。

しばらくそんなことをしていました。小さい太郎はつまらなくなってきました。きつと、かぶと虫にはおもしろい遊び方があるのです。だれか、きつとそれを知っているのです。

二

そこで小さい太郎は、大頭に麦わら帽子をかむり、かぶと虫を糸のはしにぶらさげて、かどぐちを出てゆきました。

ひるはたいそうしずかで、どこかでむしろをはたく音がしているだけでした。

小さい太郎は、いちばんはじめに、いちばん近くの、桑畑くわばたけの中の金平きんぺいちゃんの家へゆきました。金平ちゃんの家には七面鳥を二羽わかっけていて、どうかすると、庭に出してあることがあります。小さい太郎はそれがこわいので、庭まではいってゆかないで、いけがきのこちらからなかをのぞきながら、

「金平ちゃん、金平ちゃん」

と小さい声でよびました。金平ちゃんにだけ聞こえればよかったです。七面鳥にまで聞こえなくてもよかったです。

なかなか金平ちゃんに聞こえないので、小さい太郎はなんどもくりかえしてよばねばなりませんでした。

そのうちに、とうとううちの中から、

「金平きんぺいはのオ」

と返事がしてきました。金平ちゃんのお父さんのねむりうな声でした。「金平は、よんべから腹はらがいうてのオ、ねておるで、今日はいっしょに遊べんぜエ」

「ふうん」

と聞こえないくらいかすかに鼻の中でいって、小さい太郎はいけがきをはなれました。

ちよつとがっかりしました。

でも、またあしたになつて、金平ちゃんのお腹なかがなおれば、いっしょに遊べるからいいと思いますた。

こんどは小さい太郎は一つ年上の恭一君の家にゆくことにしました。

「恭一君の家は小さい百姓家でしたが、まわりに、松や椿や柿や椽などいろいろな木がいつぱいありました。恭一君は木登りがじょうずでよくその木のぼつていて、うかうかと知らずに下を通つたりすると、椿の実を頭の上に落としてよこして、おどろかすことがあります。また木にのぼつていないときでも恭一君はよく、もののかげや、うしろから、わつといつてびつくりさせるのでした。ですから小さい太郎は、恭一君の家の近くにくると、もう油断ができません。上下左右、うしろにまで気がつけながら、そりそりすとすんでゆきます。ところがきょうは、どの木にも恭一君はのぼつていません。どこからも、わつといつてあらわれてきません。」

「恭一はな」と、鶏に餌をやりに出てきたおぼさんが、きかしてくれました。「ちよつとわけがあつてな、三河の親類へ昨日、あずけただごな」

「ふうん」

と小さい太郎は聞こえるか聞こえないくらいに鼻の中でいいました。なんということでしょう！ なかのよかつた恭一君が、海の向こうの三河のある村にもらわれていつてしまったというのです。

「それで、もう、もどつてきやしん？」

と、せきこんで小さい太郎はききました。

「そや、また、いつかくるだらあずに」

「いつ？」

「盆や正月にやくるだらあずにな」

「ほんとだね、おぼさん、盆と正月にやもどつてくるね」

小さい太郎はのぞみを失いませんでした。盆にはまた恭一君と遊べるのです。正月にも。

かぶと虫を持った小さい太郎は、こんどは細い坂道をのぼって大きい通りの方へ出てゆきました。

車大工さんの家は大きい通りにそつてありました。その家の安雄^{やすお}さんは、もう青年学校にいつているような大きい人です。けれどいつも小さい太郎たちのよい友だちでした。陣^{じん}とりをするときでも、かくれんぼをするときでもいつしよに遊ぶのです。安雄さんは小さい友だちからとくべつにそんなけいされていました。それは、どんな木の葉、草の葉でも、安雄さんの手でくるくるとまかれ、安雄さんのくちびるにあてると、ぴいと鳴ることができたからです。また安雄さんはどんなつまらないものでも、ちよつと細工をして、おもしろいおもちゃにするこゝとができたからです。

車大工さんの家に近づくとつれて、小さい太郎の胸^{むね}は、わくわくしてきました。安雄さんがかぶと虫で、どんなおもしろいことを考え出してくれるか、

と思つたからです。

ちようど、小さい太郎のあごのところまである格子^{こうし}に、くびだけかせて、仕事場の中をのぞくと、安雄さんはおりました。おじさんとふたりで、仕事場のすみの砥石^{といし}でかんなの刃^はを¹といでいました。よくみるときようは、ちゃんと仕事着をきて、黒い前だれをかけています。

「そういうふうに入力するんじやねえといったら、わからん奴^{やつ}だな」

とおじさんがぶつくさいいました。安雄^{やすお}さんは刃^はの²とぎ方をおじさんに教わつてゐるらしいのです。顔をまつかにして一生けんめいにやっています。それで、小さい太郎^{たろう}の方をいつまで待つてもみてくれません。

とうとう小さい太郎はしびれをきらして、

「安さん、安さん」

と小さい声でよびました。安雄さんにだけ聞こえればよかつたのです。

1 「刃を」は底本では「刃を」

2 「刃の」は底本では「刃の」

しかし、こんなせまいところではそういうわけにはいきません。おじさんがききとがめました。おじさんは、いつもは子どもにもむだ口なんかきいてくれるいい人ですが、きようは、何かほかのことで腹を立てていたとみえて、太い眉根をびくびくと動かしながら、

「うちの安雄はな、もう今日から、一人前のおとなになったでな、子どもとは遊ばんでな、子どもは子どもと遊ぶがええぞや」と、つつばなすようにいいました。

すると安雄さんが小さい太郎の方をみて、しかたないように、かすかに笑いました。そしてまたすぐ、じぶんの手先に熱心な眼をむけました。

虫が枝から落ちるように、力なく小さい太郎は格子からはなれました。

そしてぶらぶらと歩いてゆきました。

五

小さい太郎の胸にふかい悲しみがわきあがりました。

安雄さんはもう小さい太郎のそばに帰ってはこないのです。もういつしよに遊ぶことはないのです。お腹がいたいなら明日になればなおるでしょう。三河にもらわれていったって、いつかまた帰ってくることもあるでしょう。しかしおとなの世界にはいった人がもう子ども、世界の帰ってくることはないのです。

安雄さんは遠くにいきはしません。同じ村の、じき近くにいます。しかし、きようから、安雄さんと小さい太郎はべつ、の世界にいるのです。いつしよに遊ぶことはないのです。

もう、ここにはなんにもものぞみがのこされていませんでした。小さい太郎の胸には悲しみが空のようにひろくふかくうつろにひろがりました。

ある悲しみはなくことができます。ないて消すことができます。

しかしある悲しみはなくできません。ないたつて、どうしたつて消すことはできないのです。

いま、小さい太郎の胸にひろがった悲しみはなく、
とどきない悲しみでした。

そこで小さい太郎は、西の山の上につきり、ぼ
かんとある、ふちの赤い雲を、まぶしいものをみる
ように、眉まゆをすこししかめながら長いあいだみてい
るだけでした。かぶと虫がいつか指からすりぬけ
て、にげてしまったのにも気づかないで――

底本：「新美南吉童話集 2 おじいさんのランプ」大日本図書

1982（昭和 57）年 3 月 31 日初版第 1 刷発行

1996（平成 8）年 2 月 15 日初版第 7 刷発行

※表題は底本では、「小さい太郎《たろう》の悲しみ」となっています。

※誤植を疑った箇所を、「牛をつないだ樁の木」大和書店、1943（昭和 18）年 9 月発行の表記にそって、あらためました。

入力：江村秀之

校正：諸富千英子

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。